

「未熟さ」を愛でる
～アイドルのファン文化研究を起点とする日本文化論の再考～

氏名 KAKIN OKSANA

本研究は、ジェンダー視点を持った社会的な研究でありながら、日本の現代文化の研究であり、アイドルのファン文化を起点とし、日本文化論を考えるための手がかりを探るものである。

日本文化論とは、狭義では、日本人とその心理・文化・社会を研究対象とした文化人類学や社会学などの学問の学術論文を指す用語である（青木, 1990, p. 19）。日本文化論は、日本の経済的・政治的な状況や国際関係によって変化し、または、学術的な発展に伴って変化してきたが、現在の日本社会は、ソフトパワーを「武器」とする文化的資本主義と文化的ナショナリズムの時代に突入しているとされている（Sugimoto, 2010）ため、日本文化論の展望を考えるためのヒントを探るには、伝統的な文化や歴史ではなく、世界各国で大人気を集め、ソフトパワーの戦線である現在の日本の大衆文化に着目するべきである。今まで周辺的に扱われてきた大衆文化を捉え直す作業の中で日本文化を考えるための手がかりができるのではないかと。

そうした考えのもとに、本研究が大衆文化の事例として、メディアや音楽市場に大きな経済効果をもたらしており（野村総合研究所, 2005）、日本人にとって身近な存在であるアイドルにまつわるファン文化に焦点を絞った。既存のアイドル研究の問題点を改善するため、筆者の外国人の視点を生かしアイドル現象の「当たり前」を問い直し、日本のアイドルのファン文化の独自性を探った。

しかし、日本のアイドルのファン文化の特徴は、本当に日本だけのものなのか。アイドルのファン文化は海外ではどのように実践されているのか。そのような比較研究を行うため、ファン文化を比較できる枠組みが必要であり、その中心であるファンの概念をはっきりと定義しなければならない。しかし、メディアも研究者もごく最近まではファンという人を異常者や狂信者としてしか見ておらず、ファン研究が発展しづらい環境に置かれている（Jenkins, 1992）。そのため、ファンは未だにはっきり定義されていない（Duffet, 2017）。だからこそ、新しい概念が必要である。

本研究は、以上の問題意識に基づき、日本文化論の再考のためのヒントをアイドルのファン文化の事例から探ることを目的とする。そのため、第一に、日本のアイドルのファン文化の独自性をミクロな観点から明らかにする（研究①）。第二に、ファンとは何か、ファンの集団がどのように形成されるかを検討し、比較研究のための新概念を構築する（研究②）。最後に、この二つの研究成果を合わせることで日本文化論における新たなアプローチを開拓することを目指す。

研究方法は、半構造化インタビューを用いた質的調査である。調査対象者は、日本の男性アイドルを代表するジャニーズ事務所の所属タレント（例：V6、嵐、King & Prince、ジャニーズ Jr.など）のファン、及び、女性アイドルを代表する 48 グループ・坂道グループの所属タレント（AKB48、NMB48、乃木坂 46、欅坂 46 など）のファンである日本人 35 名である。

研究①については、第一に、日本のアイドルのファン文化における「未熟さ」の愛で方という独自の現象を明らかにした。それは、アイドルのファンが将来性のあるアイドルを「青田買い」し、そのアイドルが未熟でありながら努力し成長していく様子を愛で楽しむ現象である。その現象を、本研究は「未熟さの愛で方」と呼ぶ。この現象こそがアイドル文化の独自性であると仮定し分析した。

また、この現象をジェンダー視点から見ると、ほかの側面から捉えにくいファンとアイドルの権力性が見えた。ジェンダー論の視点から分析し、アイドルのファン文化におけるジェンダー問題を明らかにした。

海外の日本のアイドルのファンも、アイドルの「未熟さ」を愛でるのか、それとも、それは日本人ファンの特有な行動であるのか。それを解明するには、比較分析を可能とする理論枠組みが必要である。この枠組みを構築するために研究②を行った。研究②では、ファンとは何かを捉え直した。そのために、アメリカの政治学者ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』理論を援用し、その枠組みの中で分析をした。アンダーソン（2007）は、国民(nation)とは、その国民に属する人々の想像の上に成り立つ「想像の共同体」であると分析した。また、ナショナリズムがそうした想像の共同体を統合するイデオロギーであると説明した。それになぞらえてファン文化を捉え直した結果、「ファン」は、国民と同様に想像の共同体であり、それを盛り上げていくイデオロギーは「ファンイズム」であるという新枠組みを提唱した。この新たなキーワードと枠組みを用い、日本のアイドルのファンの共同体を分析した。具体的には、ファンの中で「常識」として定着している様々な言説を分析し、「ファン」がどのように想像されているかを検討し、日本のアイドルの「ファン」のファンイズムを解明した。

研究結果は、日本文化論の再考に関しては、アイドルのファン文化から見出した「未熟さ」を愛でるとい文化は、歌舞伎、相撲、若者のスポーツなどの分野にも実践されている可能性が高いため、それを日本文化の本質的な価値観の一面として捉えることができるのではないかと呈した。もちろん、それを証明するには追加の調査が必要であるが、「未熟さ」の享受に着目するという日本文化論における新たな切り口の開拓ができたと言える。

次に、ファンイズムは「ファン」ごとに異なり様々な形を取ることができるが、本研究の分析は、事例であるジャニーズの「ファン」や48グループの「ファン」など、日本のアイドルの「ファン」の共通しているファンイズムである。しかし、この枠組みを用いることで、どのファンのコミュニティでも「ファン」として捉えることができ、それぞれのファンイズムを分析することができるため、国際的なファン文化研究を発展させることができると考える。